
女人画

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女人画

【Nコード】

N5507G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

女人画の大家大島潤一郎。彼のモデルになった女性達が次々と消えていく。その謎とは一体何なのか。奈良を舞台にしたホラーです。

第一章

女人画

大島潤一郎は日本だけでなく世界でもその名を知られたかなり有名な画家である。風景画や花でも有名だがその中でもとりわけ美人画で有名である。

とにかく幼女から少し年輩の女性まで描かせれば素晴らしいものを描く。その為彼に是非自分の絵を描いてもらいたいという女性は後を絶たなかった。

彼もまたそれを拒むことはなく絵を次々と描いていった。だがここで一つおかしいことが起こっていたのであった。

「ほう、女性が消えたのですか」

「はい、そうです」

とある場所でこんな話が為されていた。

「おかしいことにです」

「失踪事件というわけですね」

簡単に言えばそういうことであつた。

「つまりは」

「そうですね。ただし普通の失踪事件ではありません」

それはすぐに否定されたのだった。窓から差し込む白とそれ以外の黒が対象になっているそのコントラストの部屋の中で。二人の男が向かい合つてその話をしていた。

「何人もなのです」

「何人もですか」

「数はそろそろ三桁に達します」

こうした数字も話に出された。

「長年に渡つてですから」

「三桁とは尋常ではありませんね」

話を聞く男は言葉には感情を出さずに述べたのだった。

「よくもまあ問題にならなかったものです」

「だからこそ私はここに來ているのです」

語る男はこう彼に言葉を返してきた。

「ですから」

「ああ、そういうことですか」

「はい」

彼に対して答えたのだった。

「その通りです」

「それでは。依頼は」

「調べて頂きたいのです」

白と黒の中で言葉が慎重なものになった。話す男の眼鏡の縁が窓からの光を受けて白く輝く。話す途中身振り手振りの為しきりに動かしている指は黒である。

「ある画家について」

「画家といいますと」

「大島潤一郎です」

ここでこの名前が出されたのだった。

「彼です」

「大島潤一郎!？」

名前を聞いた方は思わずその名前を驚いたような声で言った。

「大島潤一郎というと」

「御存知ですね」

「知らない者はいないと思いますが」

声が怪訝なものになっていた。その顔は光の対比のせいで見えなくなってしまうていたが表情は声からはっきりと窺うことができた。

「彼がですか」

「実はですね」

「ええ」

「あの人が美人画で有名なのは御存知ですね」

「それもかなりですね」

「そうです」

このことが確認されたのであった。

「何しろとりわけそれで有名になっている人ですから」

「そうですね。絵心のない僕が知っている位ですから」

名前を聞いた方もこう言う程であった。

「そのことは」

「それです」

「それですか」

「そうです。確かに美人画を多く描いてきています」

「はい」

「ですがそれにより」

ここで一気に雰囲気は怪しいものになるのだった。話す方も聞く方もその怪しさの中に何もかも浸したようになって話を続けるのだった。

「多くの人が消えているのです」

「それですか」

「具体的に言えば一人描くことにより一人」

「一人ですか」

「そう。一人ずつ消えていつているのです」

こう述べられるのであった。

「それが遂に三桁にまで達しようとしていまして」

「不思議ですね」

話を聞く方はその話を聞いてこう述べざるを得なかった。

「まるで何かの怪奇話を聞いているようです」

「ですが本当のことなのです」

今の言葉は普通なら冗談として退けられるようなものであった。しかし今は違っていた。やはり白と黒の中で語られ続けるのであった。

「このことは」

「一作描くことに一人ですか」

「しかも絵を描いている途中に消えるのではありません」
ここでまた一つ不可思議なことが話された。

「若しそうであればすぐに大島氏に疑惑がかかるでしょう」
「そうですね」

これはもう言うまでもないことであつたので聞く方もすぐに頷いた。

「画伯の家やアトリエで姿を消したならば怪しいどころではありませんから」

「そうです。しかし不可思議なことに」

「どのようにして消えていったのですか？」

「それはまちまちです」

話す方の声の調子が深刻さを増してきた。

「実に色々です」

「色々ですか」

「自宅で消えることもあれば」

「それもまた随分と奇怪ですね」

「街を歩いていて急に消えることもありました」

「ほう」

今の話には聞く方も声をあげずにはいられなかった。

第二章

「不可思議だと思われませんか？これは」

「それを不可思議と言わずして何と言いましょう
こう述べるしかない話であつた。

「そういったことを不可思議と言わずして」

「そうですね。こういったことが複数起こっているのです」

「それが三桁ですか」

「そうです。公にはされていませんが」

だがそれでも事実は事実なのだった。残念なことに事実は全てが公にされるとは限らないのである。

「マスコミには報道されていません」

「マスコミは最近信用をかなり失墜させていますが」

マスコミは自分達にとって都合のいい情報しか流さないというのは残念なことに多くの人間が指摘することである。由々しき事態ではある。

「ネットでは公にされていなくとも」

「ええ。話が出だしています」

「やはり」

聞く方はそれを聞いて頷き納得した声をあげた。

「そうですね。やはり」

「一刻の猶予もなくなりましたので」

「それで私に事件の解決を依頼したいというのですね」

「宜しいでしょうか」

話す方もその声が怪訝なものになってきていた。

「それで。報酬ですが」

「お幾らで」

「一千万、いえ」

一千万はすぐに否定された。

「それを前金として」

「前金ですか」

「成功したならばもう一千万。これでどうでしょうか」

「合計で二千万というわけですか」

「そうです」

単純な計算として出て来る答えであった。

「それで。如何でしょうか」

「はい、それでは」

聞く方はあっさりとした感じでその金額で納得したのであった。

「それで御願います」

「そうですか。引き受けて下さるのですか」

「随分奇妙な話です」

彼は言った。

「そう。解決せずにはいられない程の」

「解決せずにですか」

「世の中というものは常識だけではできておりません」

彼は言うのだった。

「時として非常識も加わるものです」

「時としてですか」

「そうです」

こう述べるのであった。

「そして私はその非常識にこそ興味があります」

「それにこそ、ですか」

「常識だけで解決できるのなら世の中は何と詰まらないものでしょうか」

こうも言うのだった。

「そうではないからこそ面白いのではないのでしょうか」

「ふむ。そうですか」

「それが私の考えです」

また述べたのであった。

「それこそが」

「そうです。この間三郎の」

ここで彼の顔が浮かび上がった。黒い髪を奇麗に分けた細面の美男子である。背広の上からトレンチコートを着ており知的な笑みを浮かべている。

「考えです」

「では。宜しく御願いますね」

「はい。確か大島氏の住所は」

「奈良です」

「そうでしたね」

「はい。奈良市にいます」

その住所まで述べられたのだった。

「わかりました。それではその奈良市に行きますので」

「御願いますね」

こうして依頼は届けられたのだった。こうして役はすぐに奈良市に向かった。助手の相模逸郎も一緒である。二人は京都で探偵事務所をしているのだ。

「奈良市ですか」

「そうだ。奈良市ははじめてだったか？」

「そういえばそうですね」

逞しい顔立ちで髪を短く刈った黒い皮ジャンのその若者が間の言葉に応えていた。

「学生時代は来たことがありますけれど」

そんな話を二人の事務所がある京都から奈良に向かう電車の中で話をしていた。京都駅から近鉄で特急に向かい合って座りながら話をしている。

「こうしたことで行くのは」

「私もそうだな」

「役さんですか」

「奈良は土蜘蛛が有名だが」

「ええ」

文字通り巨大な蜘蛛の妖怪である。源頼光と戦ったことでも有名だ。

「それでも妖怪変化の類は案外少ない」

「京都に集まっていますからね」

「京都はまた特別だ」

車窓から見える景色を眺めつつ述べる。席はゆったりとしていてそこから穏やかな面持ちで外を見続けている。

「またな」

「そうですね。あそこは人の心が複雑に蠢いてきていますから」

「妖かしの者達はそうした場所にこそ集まる」

緑の田や家々が見えるその景色を眺めつつ言う間だった。

第三章

「京都はとりわけそうした心に満ちているからだ」

「だからこそってわけですね」

「何処でもそうだが京都はまた特別だ」

間はこうまで言うのだった。

「だからだ。どうしても奈良よりは京都にな」

「妖かしが集まると」

「そうなる。しかし」

間はふとしたようにまた口を開いた。

「今度の話は。一体どういったものか」

「まだわかりませんがどうも気色の悪いものを感じますね」

「そうだな。絵のモデルになった女性が次々と煙の様に消える」

「しかも時と場所を選ばず」

「不気味な話だ」

間はまた言った。

「明らかに何かがあるのはわかるがな」

「ええ。それで役さん」

相模は真剣そのものの顔で彼に対して問うてきた。

「今回はどうされますか？まずは入りますか？」

「その大島氏の屋敷にか？」

「ええ。いきなり」

「いや、それはよくない」

間はここでは相模の提案を却下した。

「それはな」

「積極策はなしですか」

「まだ相手がどういったものかわからない」

理由はそれであった。

「それで突き進んでも無駄な怪我をするだけだ」

「だからですか」

「そうだ。今は慎重にだ」

また言うのだった。

様子を見よう。いいな」

「ええ。けれど間違いないのは」

相模は険しい、鋭い光を放つ目になって述べた。

「その画伯は間違いなくこの失踪事件の犯人ですね」

「それはな。間違いない」

間も相模のその言葉に静かに頷く。

「まずな」

「ですね」

そんなことを話し合いながら奈良に着いた。奈良に着くと二人はまず宿に入った。そうしてそこに荷物を置いたうえで街に出るのであった。

最初に向かったのは奈良公園である。緑の草と木々があるそこには鹿達がいつもいることで有名だ。二人はその鹿達を見つつ話をするのだった。

「ここでも女の人が消えたんですよ」

「それも三人もだ」

「三人もですか」

「三桁に達しようという行方不明者のうちの三人だ」

「そうですか」

「多いか少ないかどうかを考えるのは別にしてだ」

そのことはまず置いておく間だった。

「だが。三人ここで消えた」

「またあれですか。歩いているうちにですね」

「そうだ」

左手に白い奈良県庁の建物を見ながら相模に語る。見たところ結構年月が経っているがそれでもそれ程古く感じないのはおそらく周りの歴史のせいであろう。

「昼にだ。急にだ」

「今回の話の特徴ですね」

相模はその話を聞いてあらためてこう述べた。

「急に消えるっていうのは」

「そうだ。消えた時間はだ」

「ええ」

「一人が十二時半、一人が一時二十三分、最後の一人が四時五十七分になっている」

「完全にバラバラってわけですか」

「少し見ただけではそれが同じ事件とは思えないな」

「そうですね、消え方は同じでも」

それは同じでも、だ。時間から見れば。

「少なくとも誰かが関わってる事件には思えませんよ」

「人が関わってるようにはな」

「その通りですよ。けれど人が関わっているのは間違いない」

「大島画伯がな」

「一体全体どうやって消してるんでしょうね」

相模は公園を歩き来る人々を見ていた。流石に今は誰も消えないようだった。

「そして何の目的で」

「よからぬ目的なのは間違いないな」

それだけは察しがつくのだった。

「それだけはわかる」

「それがわかれば充分ですかね」

「充分なのか？」

「少なくともどういった人間かは調べやすいですよ」
これが相模の考えであった。

「まあちよっと先入観が入りはしますけれどね」

「君はそれが問題なのだが」

「まあまあ」

今の間の言葉には笑って返すのだった。

「そんなことは仰らずに」

「だが。先入観はだな」

「目を曇らせるってことですよね」

「それは何度も言っているな」

間の言葉が厳しいものになった。

「いつもな。目が曇っていては解決できる事件も解決できはしない
と」

「まあそれは」

「今回は解決できる事件だ」

間は言った。

「それが解決できないのは探偵として無能という他ないのだ」

「ですね。それはわかっていますよ」

「わかっているのかどうか不安だが」

それでもであった。今彼が言うことはこうであった。

「しかしだ。とりあえずは調べよう」

「もう行方不明になった女の人達の身元調査はやりましたよ」

「そうか」

「まあまちまちですね」

こう間に述べる相模だった。述べながら丁度自分の側を通り過ぎる鹿を見る。あの奈良の鹿である。春日大社の神獣で一応は尊いとされている。ただしあまりにも傍若無人な態度なので地元の人達には全く好かれてはいない。そうした鹿達である。

「中学生もいれば奥様もいて」

「四十代の人もいたな」

「ええ。本当にまちまちです」

間に話しながらその鹿の頭をそつと撫でるのだった。

第四章

「職業も専業主婦だったり学生だったり」

「OLや看護師もいたな」

「そうです。完全にバラバラです」

「顔つきもだな」

「髪の長い人もいれば短い人もいますよ」

「それも色々であるというのだった。」

「顔だって。二重もいれば一重もいますし」

「美人さんや可愛い人もだな」

「本当に何の法則もありませんね。ただ」

「そうだな」

ここで二人の言葉が止まった。相模はここで鹿せんべいを出してそれを鹿に食べさせるのだった。すると何処からか他の鹿達が急に寄ってきたのであった。

「美人なのは同じです」

「器量が悪い人は一人もいなかった」

「顔は様々ですがそれだけは一貫していましたね」

「当然と言えば当然なのだがな」

間は言った。

「美人画で有名な人なのだからな」

「それだけに面クイってことですか」

「そうなるな。まずそれがある」

「ええ」

間の言葉に対して頷く相模だった。

「そしてそれを選ぶ画伯はというと」

「実に謎に包まれた人物だな」

その大島画伯についても話されるのだった。その間相模はずっとせんべいを鹿達にやっている。鹿達は彼がせんべいがやる側から次

々に食べていき際限がない。

「私生活も不明だ」

「一応顔はありますけれどね」

「写真を見る限りではごく普通の人間だ」

「はい」

間はここで一枚の写真を取り出した。そこに映っているのは髪がかなり薄くなり白くもなった和服のごく普通の老人である。温厚な顔でにこにこしている。

「この写真を見る限りはな」

「特におかしなところはありませんが」

「そうだ。外見はな」

「ですが私生活はというと」

「全く知られていない」

「そうなのであった。」

「誰一人として知りはない」

「勿論俺達も」

「それをまず調べていく必要があるが」

「どうしますか？」

ここで鹿達から顔を離して間に対して問うのであった。

「どうやって調べます？それで」

「まずは周囲に入る」

「周りにですか」

「懐に入ってこそ全てがわかる」

彼の持論である。

「虎穴に入らずば虎子を得ずだ」

「それで母虎に見つかったらどうしますか？」

「その時はその時だ」

こう返す間だった。

「方法はある」

「強引に、ですか」

「君はそちらの方が得意だったな」

「まあそうですね」

そのことを否定せずに真剣な顔で答える相模だった。

「否定はしませんよ。嘘じゃないですから」

「そうだな。もっとも私も不得意ではないが」

「ですが実力行使は最後の手段ですね」

「そうだ」

そのことははっきりと言う間だった。

「それはな。いつも通り最後の手段だ」

「ですね。じゃあまずは相手の懐に入りますか」

あらためて言う間だった。

「いつも通り」

「そうだ。それでは行くか」

「はい」

間の言葉に対して頷く相模だった。こうして二人はまず奈良市郊外のその画伯の屋敷に向かった。そこはよくある静かな住宅地だった。

並ぶ家々を見て相模は。間に対して話してきた。

「とりあえずここは静かですね」

「そうだな」

「鹿もいませんし」

鹿のことを不意に出してきた。

「それでかなり静かですね」

「鹿か」

「ええ。あんなに来るとは思いませんでした」

先程の鹿達のことを思い出しかなりうんざりとした顔になっていた。

「周りから次から次になって」

「それが奈良の鹿だ」

「そうなんですか」

「そしてだ。気をつけるようにな」

「気を！？」

「そうだ。いらぬ悪戯をする」

「ええ」

相模は間の言葉が何処か剣呑なものになってきているのを感じ取っていたがそれがどうしてかまではわからなかったのだった。

「するとだ」

「どうなるんですか？ そうしたら」

「復讐をされる」

そういうことであつた。

「隙を見せた時にな。その角でだ」

「鹿の角ですか」

相模もその話を聞いて剣呑な目の色になった。

「またそれはえらく物騒ですね」

「角がなくても鹿の頭突きは利く」

彼はこうも述べた。

「体重をかけてくるからな」

「またそれは碌でもない生き物ですね」

「なまじ人馴れしているからそうなる」

「ですか」

「そうだ。だから用心するようにな」

「わかりました。じゃあ奈良の鹿にはちよっかいを出しません」

「それが賢明だ」

相模のその言葉に対して頷くのだった。そしてそのうえでまた相模に言うのだった。

「君子危うきに近寄らずだ」

「そういうことですね。じゃあまあ」

「そうだ。仕事の話だが」

「特に何か感じますか？」

相模は周囲を見回しつつ間に対して問うた。周りにあるのは立派

な家々とその家々を取り囲む塀、それにそこにある木々だけである。
妖しいものは見えもしないし感じもしなかった。少なくとも彼は。

第五章

「俺には何も」

「私にもだ」

間は周りを見回しはしないがそれでも目で気配を探っているのだ。目を僅かばかり左右に動かしつつ気配を探っているのだった。

「何も感じはしないな」

「そうですよね。やっぱり」

「しかしだ」

だがここで彼はまた言うのだった。

「何かあるのは間違いない」

「そうですか」

「見るのだ」

ここで東の道を指差すのだった。

「あの方角は丑寅だ」

「ええ」

今の言葉で言えば東北の方角だ。かつては十二支により方角を言い表わしていたので東北といえば自然に丑寅と呼ばれたのである。

「魔物が出入りする場所だが」

「そこに画伯の家があるのですね」

「それだけではない」

間はさらに言葉を続けてきた。

「そこから。見よ」

「むっ!？」

相模もまた間の今の言葉にその丑寅の画伯の家がある場所を見た。見れば二人の目には小さな、だが邪な顔をした者達がそこから次から次にと出て来ているのだった。

「あれは。間違いないですね」

「そうだな。鬼だ」

「とうとうつまり」

「そうだ。間違いない」

間は強い言葉で相模に対して述べた。

「間違はなく画伯の屋敷には何かがある」

「はい」

「そして画伯自身にも」

その小さいが邪な鬼達を見て確信したのであった。

「あるぞ。だからだ」

「はい。行きますか」

こうして二人は画伯の屋敷の前まで来た。白い石垣の如き塀の向こうにかなり巨大な黒瓦の屋敷が見える。そしてその門は重厚でまるで城門の如きであった。

「相模君、感じるな」

「ええ」

二人はさらに険しくなった顔でその門の前で言い合った。

「この気配はまさに」

「そうだ。ここまで禍々しい気配は滅多にはない」

「黒ってわけですか」

「そうだ」

二人にとってはそれで充分だった。それでわかることだった。

「間違いない。ここに全ての謎がある」

「そうですね。けれど」

しかしであった。相模はその険しい顔でまた間に述べるのだった。

「どうやって中に入ります？」

彼が言うのはこのことだった。

「どうして。中に」

「若しくは画伯をどうするかだが」

「画伯は絶対にこの中にいますよ」

「そうだな」

間もまた顔を険しくさせていた。やはりこれまでになく。

「今もな」

「俺達には気付いてますからね」

「それはわからないが」

「けれど。こりゃおいそれとは中には入られませんね」

「うむ。今は退こう」

間是这样言って踵を返したのだった。

「今はな」

「あれっ、殴りこまないんですか」

「すぐに動いても必ずしもいい結果につながるとは言えない」
門に背を向けた状態で言うのだった。

「それよりも焦っていては成功するものも成功しない」

「必ず解決できる事件も解決できないですか」

「そうだ。解決できる事件を解決できないのは無能だ」
実に冷徹な言葉であった。

「私は無能ではないし私は君を無能にした覚えはない」

「言いますね、こんな若き天才を捕まえて」

「では退くことだ」

さらに彼に告げたのであった。

「天才とは時を見極められる人間のことを言うのだからな」

「だからですか」

「そうだ。君が天才というのなら今は退け」

相模に対しても背を向けたまま述べたのだった。

第六章

「今はな」

「わかりましたよ。それじゃあ」

「帰ろう」

今度は帰ることを告げた。

「奈良の街で何か食べながら考えることにする」

「奈良ですか？」

「奈良にいて他で何処で食べるつもりだ？」

「いえ、奈良ですけれど」

どういうわけかここで微妙な顔を見せる相模であった。

「どうも。ちよっと」

「有名な食べ物がないというのか」

「あまり聞かないですよね」

その微妙な顔でまた間に述べた。

「俺が聞かないだけかも知れないですけど」

「一応柿の葉寿司があるぞ」

「ああ、あれですね」

それは一応知ってはいるようだがそれでも返事は浮かないものであった。

「けれど。あれも」

「好きではないか」

「どうせなら普通の寿司がいいですね」

少し苦笑いを浮かべてこう述べた。

「寿司を食べるのなら」

「そうか。ではそれはいいか」

「はい。正直に言いまして」

「では他には特にないな」

首を捻りつつ述べた言葉であった。

「奈良にはな」

「美味しい名物ですか」

「正直私も知らない」

はつきりと答えた。

「奈良の名物とはな」

「そうですか」

「だが他の食べ物はそれなりにある」

「何がありますか？」

「駅前から少し行くとだ」

話を続けながら相模の顔を見る。彼の顔を見ると少しずつだが興味を抱いてきているのがわかる。実際に表情が明るいものになっている相模だった。

「飲み屋が並んでいる」

「ああ、そういえばそういう時間ですよね」

相模は彼の言葉で気付いた。もう夕陽になっていた。それまで明るかった世界が今では紅くならうとしている。もう夕刻であった。

「夕食の」

「ついでに飲むな」

「そうですね。まずは奈良に来たことを祝って」

「祝うわりには随分と不満そうだが」

「美味しいものがれば別ですよ」

そこはかなり現金な相模であった。

「そういうのがあればね」

「それか」

「そういうことです。けれどそれは御存知だと思いますけれど？」

「君の大食と大酒には驚かされてばかりだ」

少し慚然となった顔で述べる間だった。

「全く。わかっていれば給与のうちに食費等を入れはしなかった」

「まあまあ」

「だが。それだけの分は働いてもらうからそれでいいな」

「こき使うということか」

「君の体力に合わせているだけだ」

お互いああ言えばこう言うになっている。しかもそれをさらに続けるのだった。

「それだけだ」

「言いますね。けれど今の給与じゃその分しか動きませんよ」

「言うからにはそれだけ働いてもらうぞ」

この様な調子だった。しかしそれが続けながらも今は二人は一度駅前に戻ってそこから商店街を進んでやがて古い町並みが続く場所に出た。その時にはもう辺りは暗くなりかけていた。

「へえ。いい町並みですね」

「風情があるな」

「ええ。何かいい感じですね」

江戸時代、新しくとも明治時代を思わせる木造の建物が立ち並ぶ中を進みながら話をしている二人だった。

「何かこういう場所だと」

「どうした？」

「そういう風情の場所で飲みたくありませんか？」

「そういう場所ですか」

「ええ。どうでしょうか」

さりげなく提案する相模だった。

「然るべき場所です。どうでしょうか」

「そうだな。私もそんな気分になってきた」

相模のその言葉に乗る間だった。

「ではここは」

「ここは？」

「料亭に入るか」

考える顔でこう述べたのだった。

「料亭にな」

「料亭？奈良にもあるんですか」

「そうでなければいい感じで飲める場所だ」

ランクを下げたがそれでも飲み食いするつもりなのは変わらないのだった。

「それで。どうだ？」

「ええ。俺はまあ間さんと一緒ならそれで」

「そうか。それではな」

「はい。それじゃあ」

まずは幸いにしてその風情のある料亭に入ることができた。その座敷に案内されそこで卓を挟んで二人向かい合う。そのうえで懷石と日本酒を楽しみつつ話に入るのだった。

「それでだ」

「ええ」

「画伯の家の場所はわかった」

話は仕事の話だった。相模も刺身を食べつつ静かに彼の話を聞いていた。

「後はだ」

「要塞攻略ですか」

「そうだ。要塞は外から攻めれば攻略は困難だ」

「けれど中から入れば」

「攻略はなったも同然だ」

「こう言い切った。」

「それでな」

「じゃあ今回もそれですね」

「そのつもりだ。中に入る」

これが間の考えだった。

「そうして一気に決める。あの禍々しい妖気から画伯が犯人なのは間違いない」

「はい、確かに」

「だからだ。一気に決めたいが」

「問題はどうかやって中に入るかですね」

「そういうことだ。あの門にしろ」

入り口のその漆黒の門についてもここで述べられた。

「そうおいそれとは入ることができない」

「何かあの門事態にも邪悪なものがありますよね」

「門だけではなく屋敷全体にな」

「ですね。だからこそ中に入ろうとするだけでも」

「かなり難しい」

「ですね。本当にどうします？」

相模は眉を顰めさせそのうえで天麩羅を食べながら間に問うた。

第七章

「このままじゃどうしようもないですよ」

「しかしだ」

「しかし？」

「攻略できない要塞はない」

「ここでも言う間であった。」

「決してな」

「といたしますと」

「もう一つ言おうか」

「ええ、是非」

「中に入ることのできない要塞もない」

「こうも言うのであった。」

「決してな」

「じゃあ入る方法はあるんですか」

「そうだ。一つ考えがある」

「語る間のその目が光っていた。」

「まずはだ。モデルを探す」

「モデルを！？」

「そうだ。画伯は今も絵を描いているな」

「そうらしいですね」

そうした話はもう確かめているのであった。敵を知り己を知らば百戦危うからずという。相模もそのことはよくわかっており事前に調べていたのである。

「相変わらず精力的に描いているようです」

「そのモデルを探すのだ」

「ここで間はまた言った。」

「その女性をな」

「といたしますと」

「そちらの調べももうついているな」

「はい」

間のその言葉に対して頷いて答えてみせた。

「既に。何人かは」

「その中で最も画伯の屋敷に近いモデルのところに行く」

「彼女のところに行き？」

「後はいつも通りだ」

そしてこう相模に告げた。

「後はな」

「ああ、そうですか」

その言葉だけで全てがわかった相模であった。

「そうするんですね。いつも通りで」

「これでいいな」

「ええ。やっぱりいつも通りが一番ですね」

言いながら酒を一杯飲む。奈良の酒だ。

「何だかんだ言っても」

「君にとってはそうか」

「やっぱり俺にはそれが一番性に合ってるんですよ」

言いながらさらにまた一杯飲むのだった。飲んだ後で間の杯に氣付く。そうしてそこにすぐに酒を入れるのだった。

「済まないな」

「いえいえ。とにかくですね」

「それでいいな」

あらためて相模に問う間だった。

「今回も」

「そういうことで」

「よし。では話は終わりだ」

間は打ち合わせが終わったと見てすぐに自分の杯を手を取った。今しがた相模が酒を入れたその杯である。赤い漆塗りの杯だ。彼はその杯を見てふと声をあげた。

「これは」

「どうしたんですか？」

「いや、いい漆だな」

その杯の漆の塗り方をまじまじと見ての言葉である。

「これはまた」

「そんなにいいんですか」

「ああ。かなりいい」

また言うのであった。

「そうか。これが奈良か」

「奈良ですか」

「歴史があるだけはある。ここまでの漆塗りが普通に出て来るとはな」

「？そうですか？」

相模は漆塗りがいいと言われてもあまりよくわからない感じであった。間の今の言葉に首を傾げどうにもわからないといった顔にさえなっている。

「見たところあまり変わらないですけれどね」

「使っている漆が違う」

だが間はまた言った。

「この黒さがな。それに」

「それに？」

「塗り方だ」

今度はそれについて述べた。

「塗り方もな。やはり違うな」

「そうなんですか」

「丁寧に重ね塗りをしている。これがいい」

「重ね塗りですか」

「それはわからないか」

一瞬だけ相模に目をやって問うた。

「君には。それは」

「正直漆とか陶器とかに興味ないんですよ」

彼の返答は熱心な間と比べて実に素っ気無いものであった。

「それにわからないですし」

「残念なことだな」

「俺はそれよりも食べる方ですし」

言いながら早速また食べた。奈良の野菜料理である。

「まあ奈良の野菜もそこそこいけますね」

「そうだな。それはな」

それには間も同意はした。

「しかし。君は本当に」

「まあいいじゃないですか」

ここからはもう言葉を遮ってきた。

「今は仕事を終わらせる。それですよ」

「そうだ。早い。明日早速仕掛けるぞ」

「明日ですか」

「これもいつも通りの筈だが」

もう漆器を見てはいなかった。間に目を向けて問うてきた言葉である。

第八章

「違うか」

「確かにそうですね」

「そうならいいな。それではだ」

「ええ。明日ですね」

「用意はもうしてあるな」

「こども相模に対して尋ねた。」

「その用意は」

「幾ら俺でも商売道具は忘れませんから」

笑って言ったこの言葉が答えであった。

「幾ら何でも」

「それならいい」

「まあそういうことで。じゃあ今回も手早く済ませて」

「後はどうするつもりだ？」

「そうですね。お金も入りますし」

「うむ」

「観光でもしますか」

能天気な調子でこう言うのであった。

「仕事の後で軽く」

「軽くか」

「何日かかけて」

こんな調子で言葉を続ける。

「楽しませてもらいますよ」

「それはいいが私は帰るぞ」

「あれ、帰られるんですか」

「何時までも事務所を空けておくわけにもいかない」

こう言うのである。

「だからだ。それでだ」

「何だ、じゃあ俺一人ですか」

「それでもここにいるんだな」

「ええ、そのつもりです」

このことは変えるつもりはないのであった。

「折角奈良に来たんですし」

「なら一人で色々と回ってみればいい」

そのことについては特に何も言わない間であった。

「仕事が終わればな」

「その時からまあ」

「お金も入るしな」

「そうですね。だからゆっくりと派手に」

「全く。君は本当に旅や観光が好きだな」

「人間の喜びですよ」

旅や観光をこうまで言うのであった。

「はつきり言いましたね」

「では酒や御馳走は何だ」

今飲み食いしているそれについても問うた。

「そちらは何なのだ？」

「勿論それですよ」

にこやかに笑って間に答えたのであった。

「人生の喜びは一つとは限りませんから」

「幾つもあるのか」

「だから人生は楽しいんですよ」

何処までもエピックリアンなのがわかる言葉であった。それはまるでこの世にはそうしたもののしかないかのような実に明るいものであった。

「違いますか？」

「だがその前にだ」

「ええ。冒険ですね」

「仕事だ」

あえて真面目に言う間だった。

「それはいいな」

「勿論。そちらも楽しませてもらいますんで」

「そちらもか」

「楽しみは冒険の後で手に入れるものですから」

「ここでも仕事を冒険と言うのであった。」

「ですから。そういうことで」

「よし。では明日な」

「はい。早速仕掛けますか」

「まずは中に入る」

間の言葉が引き締まった。

「それでいいな」

「ええ、それじゃあそういうことで」

相模は最後に頷いた。それからはその懷石料理に奈良の酒を楽しむのだった。そうして次の日。奈良でも有名な名家である中鷹家に二人の女がやって来たのである。

「お茶のですか？」

「はい、そうです」

「私達はこのいう者でして」

中鷹家の壮麗な玄関で二人のその女は名刺を出していた。二人共見事な和服を着ており奇麗に化粧をして髪を整え実に気品のある格好である。

「お嬢様が習っておられるお茶の方ですか」

「左様です」

「お嬢様にはまだ御目にかかっていませんが」

二人はそれぞれ家の人に対して言っていた。その人は若く美しいが気品といったものはあまりない。割烹着を着ているところからどうやらこの家の使用人さんらしい。

「それでも。一度御目にかかりたいと思い」

「こうして参りました」

「そうだったのですか」

その使用人さんは名刺を見たということもありそれで納得したのだった。

「それで」

「はい。それでですね」

「お嬢様は」

「今出られる準備をされています」

使用人さんはこう述べた。

「丁度今から出られるので」

「そうなのですか」

「一体どちらに」

「大島画伯のお屋敷です」

二人はこの名前を聞いてその整った化粧の目の奥を光らせた。

「絵を習われているのと一緒に絵のモデルになられていて」

「左様ですか」

「はい、ですから今御会いするわけには」

「いえ、大島画伯ですね」

「その方ですね」

しかし二人はここで引き下からずにこう言ってきたのだった。

第九章

「宜しければ私共もそちらに」

「御一緒させて頂けませんか」

「画伯のお屋敷にですか」

「はい」

使用人さんの言葉に対してこくりと頷いたのであった。

「左様です。宜しければ」

「是非」

「またどうして」

「はい、実は」

「私達も前々から絵に興味がありました」

二人は今度はこう言うのだった。

「それで是非一度はあの画伯のお屋敷に行ってみたいと思っておりまして」

「それでなのです」

「そうだったのですか」

「宜しければ、ですが」

「如何でしょうか」

「それは」

使用人さんは二人の女にこう言われて戸惑った顔になったのだった。

「私に言われましても」

「駄目なのでしょうか」

「やはり」

「いえ、そうではなくてですね」

その大きく立派な玄関の扉の向こう側で困った顔になっていた。家の玄関の造りは和風でこれまた実に見事なものであった。

「私にはそういうことを決めることは」

「できませんか」

「申し訳ありませんが」

本当に申し訳なさそうな顔で述べたのであった。

「そういうことは」

「そうなのですか」

「お嬢様次第ですが」

「牧田さん」

ところがここで玄関のところから声がした。

「私はいいのですが」

「お嬢様」

その牧田さんと呼ばれた使用人さんはその声で後ろを振り向いた。二人は彼女の向こうを見た。するとその視線の先にいたのは。

桃色の花柄の振袖を着た黒い髪の少女だった。その黒髪は長く絹の様に奇麗でさらりとしている。その顔はまるで人形の様に白く瞳は大きい。その少女の言葉だった。

「もう準備は終えられたのですか」

「はい」

少女は静かに彼女に対して答えた。

「私は別に。先生の絵を御覧になられたいのですね」

「はい、そうです」

「その通りです」

二人は少女の言葉に対して頷いた。

「中鷹早百合さんですね」

「そうです」

少女は一人の年輩の方の言葉に答えた。

「そうでしたら私は」

「有り難い御言葉です」

「それなら」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「画伯は少し気難しいところがありました」

早百合という少女は不意にこう言い出したのである。

「そこは御注意下さい」

「ええ、それはわかっていきますので」

「お話は聞いています」

「それも御存知なのですね」

二人に対して確かめるようにして尋ねてきた言葉だった。

「それでは。それでは」

「はい、御同行させて下さい」

「それで」

こうしてこの二人は彼女について画伯の屋敷に行くのだった。その画伯の屋敷の門は相変わらず禍々しい雰囲気を醸し出していた。だが早百合はそれに全く気付くことなく門の隣の勝手口の鍵を開けてそこから屋敷の中に入った。やはりその二人も同行していた。

「この庭は」

「これはまた」

「如何でしょうか」

早百合は自分の後ろにいる二人に顔を向けて問うてきた。

「このお庭は」

「木と水の使い方がいいですね」

年輩の方の女がその庭を見て答えた。見ればその庭は周りに木々を配し緑で下を覆っている。そして池は庭の中央にありそこに竹や泉を配している。その池の中には鯉がいるのが見える。その鯉はどれも見事な色彩を持っている錦鯉であった。

「そして鯉もまた」

「鯉も奇麗ですよ」

「ええ」

年輩の女は早百合の言葉に答えた。

「やはり世界に名を知られているだけがあります。庭もまた」
「素晴らしいですよ」

「画伯は風景画でも評判なのですよね」

「そうです」

早百合は彼女の言葉に答えた。その間若い方の女は一言も話さずただ周りを見回しているだけである。だがその風景を見てもあまり何も感じていないようである。

第十章

「ですがやはり一番評価が高いのは」

「人物画ですね」

「俗に美人画と言われています」

「こう述べる早百合だった。」

「それは。そして私は」

「今モデルをされているのでしたね」

「はい、そうです」

「こう答えるのであった。」

「もうすぐ完成されるそうです」

「もうすぐですか」

「はい。ですから今から」

「モデルになられるのですね」

「その時は二人になります」

「早百合はこう静かに述べた。」

「画伯と二人です」

「そうなのですか」

「はい、二人です」

「また二人という言葉が繰り返された。」

「二人で。画伯は絵にはとても厳しい方ですので」

「はい。それでは」

「そこを御気をつけて」

「わかりました」

そんな話をしながら屋敷の中に入った。屋敷の中もやはり和風でその内装は実に整っていた。畳は眩いまで新鮮な緑であり廊下も光を反射させていた。だが二人はその奇麗な屋敷の中を二人で見回りつつあることに気付いたのだった。

「おかしいですね」

「そうだな」

年輩の女が若い女の言葉に頷いていた。何故かここでは声は男のそれになっていた。

「これだけ広い屋敷なのに人がいませんね」

「使用人が何人かいてもおかしくはない広さだがな」

「ですね。あまりにも妙です」

若い女はまた言った。

「一人もいないのは」

「どういことですかね」

「異様なことがあるのは間違いない」

年輩の女は述べた。

「それはな」

「部屋も一つ一つはおかしなところはないですね」

「ああ」

また若い女の言葉に頷いた。

「とりあえずはな」

「けれど屋敷全体としては」

「異様だ」

また異様という言葉を出した。

「あまりにもな」

「何かがあるのは間違いないです」

若い女は言う。

「絵も一つ一つは問題はないですが」

「うむ」

「今度はこの部屋に入りますか」

左手の襖の前に立って述べた。襖も質のいい和紙を使っておりやはり見栄えがいい。しかし何処か無機質なものもそこにはあった。

「そうしますか？」

「そうするとしよう」

年輩の女も襖の前でその提案に頷いた。

「ではな」

「さて、今度こそ人がいますかね」

「それとも絵か」

年輩の女は呟いた。

「何が出るかだな」

「ですね」

そんなことを言い合いながら襖を開けた。するとそこには。

絵があった。それもかなり巨大な絵だ。壁に添えられているようにしてそこに置かれているその絵に描かれているのは。二人をして顔を顰めさせるに足るものだった。

「これは」

「美人画！？だが」

「ええ。一人ではありませんね」

「そうだな」

二人はその絵を見て顔を顰めさせ続けていた。そこに描かれている美人達は様々な年齢に顔立ちに服装だった。その数は一見してどれだけいるのかわからない程だった。

だが問題はそれではなかった。それは。若い女がそのうちの一人の顔を見て言った。

「この人は」

「どうした！？」

「失踪した女性の一人です」

こう言うのである。

「そしてここにも」

「その人もか」

「はい。この人もこの人も」

彼女は続けて言うのだった。

「皆そうですよ」

「どういことだ」

年輩の女は彼の驚いている言葉を聞いて顔をさらに顰めさせた。

「だとすると」

「それにです」

ここで彼女はさらにその年輩の女に述べた。

「この人は」

「むっ!？」

「早百合さんですよ」

こう言うのだった。

「間違いありません。描きかけですけど」

「むう……」

「しかもです」

若い女の顔が曇ってきた。顰めさせただけではなくってきた。

「次第に」

「次第に!？」

「さらに描かれています。ほら」

「なっ……」

年配の女はそれを聞いて実際に絵を見て驚愕の声をあげた。見れば確かにその通りだった。絵はそこには誰もいない筈なのに勝手に絵が描かれていく。二人はその一人で描かれていくその絵を見てそこからあることを察したのだった。

第十一章

「まさか。これは」

「間違いないな」

二人は強張った顔で言い合った。

「今まさにこうして」

「はい、早百合さんはこの絵に」

「危険だ」

年配の女が言った。

「このままでは早百合さんは今にでも絵に」

「そうですね。そしてそれを行っているのは」

「探すぞ」

年配の女の決断は迅速だった。

「すぐにだ。いいな」

「はい」

二人はそれに頷きすぐにその部屋を出た。二人が前から消えてもまだその絵は一人でに描かれ続けていた。そこにいる早百合は間もなく本人になろうとしていた。

二人は遮二無二部屋を開けて回って探した。そうして遂にある部屋を探し出した。そこにいたのは。

まず早百合がいた。彼女はあの振袖姿のまま静かに座っている。だがそこでまるで人形のように強張りそうして微動だにしなかった。その彼女の前にいるのは。

一人の老人だった。一見温和そうだがその目は血走り真っ赤になっている。その目で今描いているその絵と早百合を見つつ。不気味、いや凄惨な笑みを浮かべていた。

「もうすぐだ。もうすぐ」

彼はその絵を描きながらその笑みと共に言っていた。

「もうすぐでこの絵も完成する。そうすればわしはまた」

「何のつもりかわからないがな」

「それ以上描いてもらうわけにはいかない」

ここで二人は彼に対して言った。

「止めてもらうぜ」

「大島画伯だな」

「その通りだが」

その言葉に気付いた彼は二人に顔を向けて答えてきた。

「誰だ？」

「誰か？ そうだな」

若い女は画伯の声に応えて不敵に笑ってみせた。

「正義の味方さ」

「正義の味方だと？」

「ああ、覚悟しな」

彼女は言いながら己の着物を派手に脱ぎ捨てた。そしてその素顔を画伯に対して見せるのだった。

「名前は相模逸郎っていうのさ」

「彼は私の助手だ」

もう一人、年配の女もまたここで着物を脱ぎ捨て本来の顔を見せてきた。

「私の名前は間三郎という」

「間三郎に相模逸郎か」

「まあ知らないだろうな」

「その通りだ」

二人の問いを聞いても冷淡なままの画伯であった。

「それで何のようだ」

「何の样もこんな样もなくてな」

相模はその冷淡な画伯に対してまた告げた。

「あんたの絵はもう描かせるわけにはいかないんだよ」

「そして今まで失踪、いや捉えている女性達を解放してもらう間もまた言うのだった。」

「必ずな」

「生憎だがそうはいかん」

画伯はきっぱりと二人の言葉を断るのだった。

「それはな」

「解放しないっていうのかね、この期に及んで」

「全てはわしの芸術なのじゃ」

その血走った目で語る画伯だった。

「全ての美貌をわしの芸術に封じる為にな。それはならん」

「まあ話し合いで解決できるとは思っちゃいないがね」

相模は画伯のその狂気に満ちた言葉を聞いて述べた。

「じゃあどうするかはわかるよな」

「話し合いは決裂した」

二人は画伯を見据えて正面を向けてきた。

「覚悟はいいな」

「こうなれば強制的に解放させてもらう」

「できるのか？」

画伯もまた二人に対して正面を向けた状態になってその凄惨な笑みを見せてきた。

「このわしから」

「自信があるってことは切り札があるってことか」

「如何にも」

見れば右手に絵筆を、左手にパレットを持っている。木製のそのパレットには様々な絵の具が置かれている。一見して闘う姿ではない。

「相模君」

「ええ」

相模は間の言葉に対して頷いた。視線は画伯を見据えたまままだ。

「ただの絵ではないな」

「そうですね、明らかに」

「ほう、それはわかるみたいじゃな」

画伯も二人の言葉を受けてその不気味な笑みをさらに怪しいものにさせるのだった。

「如何にもじゃ。わしが描けるのはパレットだけではない」
「というと」

「こういうこともできるのじゃよ」

こう述べる目目の前の空間に絵を描きだした。するとそこから一体の鬼が姿を現わしてきたのであった。

第十二章

「鬼!？」

「まさか」

「そのまさかじゃよ」

不気味な笑みのまま述べた言葉であった。

「本物の鬼じゃよ。これは」

「そうか。絵で何でも出せるんだな」

相模はすぐにそう察したのだった。

「あんたは」

「如何にも」

そして画伯自身もそのことを認めるのだった。

「その通りじゃよ。わしは何でも描き出せるのじゃよ」

「悪魔にでも魂を売ったのか」

間は何故画伯がそうしたものを描けるのかを予想したのだった。

間はそうなった理由を考えていたのであった。

「それとも」

「この筆は特別じゃ」

筆を右手に持ったままの画伯の言葉である。

「これはのう」

「筆か」

「数百年を経て生を得た筆」

画伯は言う。

「わしはこれに巡り合い今に至った」

「ああ、そういうことか」

相模はその言葉を聞いて画伯が何故今に至ったのかをわかった。

「あんたはその筆をどっかで手に入れてそれで天才って言われるようになったんだな」

「偶然街の片隅で不気味な老婆に売られていたこの筆をのう」

「老婆!？」

「高田とかいったのう」

不意にこうした名前が出て来た。

「その老婆から安く買ったのじゃよ。まだ若かったわしはな」

彼は語るのだった。

「この筆は美女を描けばそれだけ力を増す」

「美女!？」

「じゃああなたのあの絵は」

「あの絵も見たのか」

それを聞いても驚いた様子も悪びれた様子も二人に対して見せはしなかった。

「美女達の絵も」

「そっちのお嬢様もいたな」

相模はちらりと早百合を見て述べた。早百合は相変わらずまるで人形になってしまったかのようにそこで動きはしない。完全に沈黙したままである。

「一人でに描かれていたっけな」

「わしが絵を描けばあそこにも描かれる」

画伯はこう述べた。

「そしてじゃ。完全に描き終わったその時に」

「あの絵に取り込まれてか」

「左様。この筆の力となる」

そういうことであつた。

「そしてわしのな」

「どうやらあんたも知っててやってるみたいだな」

相模の声が不意に強いものになった。

「どうやらな」

「それがどうしたのじゃ?」

「まだあんたが筆に完全にに取り込まれているならよかったんだ」
「その通りだ」

間も画伯に対して言ってきた。

「そうなら筆を折れば済むだけだ」

「けれどあんたは今わしの、と言った」

二人が注視したのはそこであった。筆の力になるだけではなく自分の力にもなると言った。二人が見たのはそこなのである。

「そこだな。あんたは筆と一体化しちまっている」

「それならばこちらも容赦することはない」

「ふむ」

画伯は二人の言葉をまずは落ち着いて聞いた。だからといってその怪しい気配を消してはいないが。

「言いたいことはそれだけか」

「ああ、それだけさ」

「悪いが倒させてもらう」

二人はまた言った。

「今ここでな」

「覚悟してもらう」

「わしを倒すというのか」

画伯は二人の今の言葉を聞いてまた述べたのだった。

「このわしを」

「さっき言った通りさ」

「こちらもその為に」

二人はここでそれぞれ何かを出してきた。それは日本刀であった。

「こうしたものを用意してきたんだ」

「只の刀ではない」

間はその刀を両手で構えながら画伯に対して述べた。

「退魔の剣だ」

「退魔か」

「その通りだ。これでその命、絶たせてもらう」

「あんたのその邪悪になっちまった命をな」

「さらに面白いのう」

画伯は二人のその言葉を聞いても邪悪な笑みを消さなかった。消さないどころかその寂差をさらに高めさせ哄笑さえしているのだった。

「そこまで自信に満ちてわしを倒すとはのう」

「間さん」

相模がここで一步前に出て間に声をかけてきた。

「俺が鬼を引き受けますんで」

「君がか」

「間さんは画伯を御願いますね」

「わかった」

「これで終わりってわけじゃないでしょうけれどね」

「それはわかっている」

静かに答える間だった。

「それはな」

「鬼を倒せば俺もすぐに行きますんで」

「頼むぞ」

今度は真剣な顔で答える間だった。

「それはな」

「ええ。そういうことで」

「覚悟するのは主等じゃ」

画伯はあらためて二人に告げてきたのだった。

「それはのう」

「またその絵で何かを出してくるつもりか」

「如何にも」

それが彼の考えであった。

「その通りじゃよ」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに早速また出てきた。

今度は土蜘蛛であった。

第十三章

「奈良じゃからのう」

「だからその土蜘蛛か」

「そういうことじゃ」

これが老人の言葉であった。

「さあ。次は」

次々に出してくる。鶴に濡れ女に牛鬼に。恐ろしい妖怪ばかり出てきた。忽ちのうちに間を取り囲み動けなくしてしまうのであった。

「さて。取り囲んだぞ」

「そうか」

「そうかか。余裕じゃのう」

「絵から生まれた妖怪だな」

間は画伯のその怪しい笑みを聞いてもまだその余裕と言える態度を崩してはいなかった。

「ならば」

「ならば？」

「相模君」

間はここで相模に声をかけてきたのだった。

「相手は絵だ」

「絵ですか」

「そうだ。わかるな」

「それなら楽勝ですよ」

鬼と戦い続けている。かなり押されてはいる。鬼が振るう金棒を刀で防いでいる。どう見ても力負けしているのは明らかであった。

「絵ならね」

「言っている意味がわからんが」

「絵ってのはな」

相模は不敵な笑みと共に言う。

「致命的な弱点があるんだよ」

「弱点じゃと？天才のわしの絵に」

「絵は絵なんだよ。なら」

「やるぞ」

「はい。これでっ」

ここで二人は同時に剣を一閃させた。だがただ一閃させただけではなかった。見ればその刀には赤いものが宿っていたのだった。それは。

「なっ！？それはまさか」

「そうさ。俺達はただ刀を操れるだけじゃないのさ」

「こうした力も持っている」

二人はそれぞれ言った。

「こうしてな。刀に炎を宿らせることもできるんだよ」

「絵は紙に描くもの」

相模と間はどこでまた刀を振るった。その炎が妖怪達に触れると彼等はそれだけで燃え上がり消え去って行く。そうして画伯に次第に近付いていた。

「なら炎には弱いよな」

「紙ならばな」

「おのれ……」

「さて、観念しな」

相模は摺り足で画伯に対して近付いた。既に二人との間には何もいはいない。

「もう終わりだぜ。幾ら描いてもな」

「まだだ。まだわしは」

画伯は血走った目で言うのだった。

「描くのだ。絵を」

「そうかい。それがあんたの意志なんだな」

「左様。だからこそ」

彼は言うのだった。

「ここで倒されるわけにはいかんのだ」

「そんなことは好きに言っておくんだな」

「少なくとも今まで捉えてある女性達は解放させてもらう」

間も間合いを詰めていた。二人はそれぞれ構えを取っている。

「ここだな」

「わしは。わしは」

その間合いを詰める二人に対して画伯はさらに血走った顔を向けていた。

「どうしても。まだ描くのだ」

「むっ!？」

「何だ!？」

ここで画伯の姿が暗い何かに覆われた。そしてその後で彼は。得体の知れない黒い不気味な存在になってしまっていたのだった。

「何だこいつは!？」

「まさかとは思うが」

間はその不気味な、影を思わせる姿を見て言うのだった。

「画伯と筆の邪悪な心がそのまま実体になったのか」

「実体にですか」

「そうだ。画伯と筆は完全に一つになっていたな」

「はい」

相模もそのことはわかっていた。

「そうですね。完全に」

「それだ。彼は今完全に魔物になった」

「魔物、ですか」

「手強いぞ」

鋭い声で相模に告げる。

「これはな」

「みたいですな」

答える相模の声も鋭いものになっていた。

「それかなり」

「炎は刀に宿らせたままにしておく
間は言った。」

「それで切りつけていくぞ」

「はい。それじゃあ」

ここでその影の腕が襲い掛かった。しかし二人は左右に動きそれをかわした。

「グウ……」

「危ないところだったな」

「ええ。絵の化け物共とは全然違いますね」
最早相模の言葉には余裕はなかった。

「これはまた」

「いいか、相模君」

「何かお考えがあるんですか？」

「跳ぶぞ」

こう言うのだった。

「跳んでだ。そして」

「ええ。そして」

「刀を投げる」

これが彼の作戦だった。

第十四章

「炎を帯びたその刀をな」

「俺もですか」

「君はそのまま正面から攻めてくれ」
跳ぶのは彼だけということだった。

「それでいいな」

「わかりました。じゃあそのまま」

「頼んだぞ」

あらためて彼に告げるのだった。

「それでな」

「はい。それじゃあ」

「よしっ」

ここで間は跳んだ。年齢からは想像もできない程素早く、そして高く跳んだ。そうして一気にその刀を振り下ろすのだった。

「むうっ!？」

「これで終わりだ」

間は振り下ろしたその刀を画伯が化身してしまったその怪物に対して投げつけたのだった。

それと同時に相模も正面から斬りかかる。そうしてそれで同時に攻撃を浴びせる。

まずは相模が迫るその怪物の右腕を払う。それと共に間の刀が怪物の胸を貫いたのだった。

「やったか!？」

「やりました!」

怪物の右腕を切り払った相模は間の刀が怪物の胸を貫いたのを見て会心の声をあげた。

「これなら!」

「そうか。そうなのだな」

「ええ」

今度は着地した間に対して答える。間は右手と右膝を畳の上に着けそれで衝撃を殺して着地していた。やはり年齢を感じさせない動きであった。

「流石に胸を貫かれたならば」

「終わりだな」

「実際に動きを止めていますよ」

「ああ」

見ればその通りだった。画伯が変化した怪物はその動きを完全に止めてしまっていた。

そうして。その姿をゆっくりと、蜃気楼の如く消していき。後に残ったのはあの筆だけだった。しかもその筆も縦に奇麗に真っ二つに折れてしまっていた。

「これってどういうことですかね」

「やはり画伯は」

間はその折れてしまった筆を見つつ相模に述べた。

「筆と同じになってしまっていたな」

「同じですか」

「そうだ。高田といったが」

「まさかとは思いますがね」

その高田という名前で相模の顔も歪んだ。

「あの高田家ですかね」

「あの女の祖母だな」

間は言った。

「高田依子のな」

「会ったことはないですけど相当酷い奴らしいですね」

「私も話に聞いているだけだがな」

実際のところこの辺りは間も相模と同じなのだった。

「あちこちでことあるごとに邪なことを企てているらしいな」

「そうですね。そいつの婆さんですか」

「それもかなり邪悪だったという」

「俺も聞いていますよ。そいつが若き日の画伯に筆を売って」

「おそらく狙っていた」

間はそう読んだ。

「画伯が筆にその邪な心を同じにさせるのをな」

「画伯の元々の邪悪さをも読んでですか」

「そういうことだ。そして今の事態に至った」

「厄介な話ですね。それこそ半世紀も続く話だったなんて」

「全くだな。だがこれで話は終わった」

「ええ」

二人が言っているその横でまずは早百合が目を開いた。そうして屋敷が急に女の人達の声で騒がしくなってきたのだった。

「あれ！？何故この屋敷にまた」

「家に帰った筈なのに」

「あの絵から出て来ているみたいですね」

相模はその声を聞いて言った。

「どうやら」

「そうだな。画伯がいなくなり絵の魔力が消えた」

だからなのだった。

「それによってな」

「はい。それじゃあ後は」

「私達の仕事は終わった。帰るか」

「ですね」

二人は折れた筆は拾って間のライターで火を点け燃やしてそのまま消し去ってしまった。それから間は己の刀を拾って治めるとそのうえで二人で姿を消した。その後の騒動は二人の知ることではなかった。

仕事が終わった次の日。間は旅館を後にしようとするが相模はそのまま残っていた。

「本当に残るんだな」

「奈良で遊びたいですから」

旅館の部屋で洒落た服に着替えながら間に答える相模だった。

「そういうことで」

「何日で帰ってくるつもりだ？」

「三日ですかね」

少し考えてから答えた相模だった。

「多分」

「多分か」

「一週間もかからないですよ」

「一週間も開けるのは流石にどうかと思うがな」

一週間と聞いているのは流石に間も顔を顰めさざるを得なかった。

「流石にそれはな」

「そこまではないですから」

「だいたいがな」

「それじゃそういうことで」

相模は能天気な笑みを浮かべながら宿の部屋を出ようとする。畳の部屋には相模の荷物が置かれたままになっていた。

「行って来ます」

「報酬は普段通りでいいな」

「はい、それで御願いますっていうか」

ここで話を変えてきた相模だった。

「そうしてもらわないと困りますから」

「いっそのこと事務所の机の中に現金で置いておこうか？」

「だったら京都に戻らないといけないじゃないですか」

「戻ったらどうだ？」

かなり冷淡な間の言葉だった。

「いっそのこと」

「じゃあ何の為に仕事やったんですか」

こう言って口を尖らせる相模だった。

「遊ぶ為じゃないんですか？」

「一度そういう考えをなおした方がいいのではないかと思うがな」

「まあそれは言わない約束で」

それは聞くつもりはない相模だった。

「じゃあお金のことは御願いますね」

「ああ、わかった」

渋々ながら頷く間だった。

「じゃあ早いうちに帰って来るようにな」

「さもないと役さんとこの事務所に仕事を持って行かれますしね」

「今あの二人はフランスに行っているがな」

「フランスですか」

「だから暫くはいないがな」

こう相模に述べた。

「それでもだ」

「わかりました。じゃあ早いうちに帰りますんで」

「そういうことでな」

こう言い合って別れる二人だった。相模は奈良の街に出て間は京都に帰る。謎は解けて今はそれぞれ晴れやかな気持ちの二人は今は休息に入るのだった。戦いの後の休息に。

女人画 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507g/>

女人画

2010年10月8日15時47分発行